東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

自我形成と価値観：青年期の人生観

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1990-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/710

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

自我形成と価値観
――青年期の人生観――

岡　田　精　一

目　次

第1章　自我意識の形成
1　自我とは
2　自我意識の発達
3　自己の肯定と否定
4　自我の確立

第2章　自我の充実と価値観
1　同一化と価値観
2　価値意識の発達
3　価値と欲求
4　価値の本質

はじめに

青年期は，児童期まで漠然としていた自分というものが次第にはっきり意識され，自分の人生について真剣に考え出す時期である。身体的成長とともに，心理的にも両親との一体感が失われた青年は，自分自身をこの世でただ一人の存在として意識する。これが自我意識のめざめである。

自我が一艘の舟として社会という大海へのり出すには，期待とともに大きな不安がつきまとう。「私とは何か」「私は何のために生きるか」「私はどのように生きるべきか」など，青年は新しい航海の中で一つ一つ自分自身の生き方を問う。そして，そこに待ち受けるさまざまの障害を乗り越えるために，自分の生き方の方向を決める羅針盤を持たねばならなくなる。

「自分はこの人生をどのように生きるか」という問いは，人生の価値の選択であり，人生観，または価値観に通じる。あるいは「生きがい」とよぶこともできよう。この価値の選択は，自我を形成する青年期において行動の要(かなめ)をなす重要な問題である。

今日，日本の経済成長は世界も目を見張るばかりであるが，一方，物質的豊かさ生活の快適さは，人間本来の生き方を見失わせつつある。かかる時に青年の生き方に目を向け，その心理の根底を探ることは，青年心理学のなおざりにすることのできない問題である。

ここでは，行動の原動力となる価値観が自我の成長のなかでどのように形成されるか，多様な価値観が存在する現代，自我の充実につながる本質的価値とは何かを探ってみたいと思う。

第1章　自我意識のめざめ

1　自我とは

青年期は，「第2の誕生」(注)$_{1-1}$といわれるように自我意識の急速に発達する時期である。

「自我」ということばは，日常「自己」ということばと，あまり区別しないで使われている。しかし，よくみると青年期の「自己」は，児童期までの自覚されない自己とは一線を画し，自分自身によって「意識された自己」である。「自分とは何だろう」と青年が自己を意識し始めるのは，自分を客観化して見られるようになった証拠である。ここにおいて，自己は「見る自己」と「見られる自己」に分化される。ミードの言い方を借りれば，主体性をもって見る方の自己は“the I”，主体によって見られる方の自己は“the me”ということになる。(注)$_{1-2}$「自我」とはしいていえば，この「見る自己」によって「意識された自己」なのである。

青年は自分自身を，他のだれとも異る独自の存在として理解する。と同時にその独自な自己を，社会の中でどのように生かしていくかを模索している。自我は一朝一夕にできるものではなく，多くの迷いや悩みを経て形成される。時には自分自身収拾がつかなくなるような状態にも陥るが，そこに思考力・判断力・意志力などさまざまの心の働きが関与し，ひよわな自己は次第に主体性のあるたくましい自我へと育っていくのである。人生観は，こうした自我の形成と歩みをともにしてつくられていく。

そもそも自我の萌芽は既に乳児期にあり，母親を独占しようとしたり，自分のおもちゃをこれは自分のものだとして，他人に使わせないというような行動がその初めの表われである。また，歩行やことばが自由になる2～3才ごろは，交友関係の広がりの中で自分の思い通りにいかない他者を知らされて，いわゆる「第1反抗期」を体験することが自我意識の発達を急速に促進させる。しかし，ここではまだ自分で自分を観察するなどということはできない。ようやく自他の区別がつき，自己主張ができるようになったというところである。

その後，児童期を経てこの意識は序々に広げられ，親や大人の賞罰により自分の行動を反省できるようになったり，仲間同志の力関係の中で名誉心や羞恥心あるいは優越感などが育っていくのである。こうして自分の行為を対象化することができるようになるが，ここでもまだそのような行為をする自分自身の内面にまで目を向けてはいない。

「見る自己」と「見られる自己」の分化が行なわれて，自我意識が飛躍的に発達するのは青年期である。この成長は遅かれ早かれだれにも青年期には訪れて，他者の存在を強く意識させ自他の別を認識させる。他者はどのように考えているか，という認識は自分が他者にどのように見られているか，という自己認識に反映する。たとえば，自分がこれまで当然として特に気にもかけなかった自分の日常生活，知能・性格・容姿などについても，他者の無視や称賛などの反応が自己評価の目安につながるのである。自己の内面における「見る自己」と「見られる

自己」との分化は，この外的体験に刺激されて表われてくる。

2　自我意識の発達

そこで，この青年期の自我意識発達の要因を，身体的，知能的，社会的成長という３つの方面との関連からとらえてみよう。

第１に，自我意識発達の要因は身体的成長による。

児童期と青年期を区切る最初の徴候は身体的変化である。先ず，**図１Ａ**のように身長だけをみても著しい成長がみられる。それは**図１Ｂ**の発達曲線でみるとさらに明瞭で，誕生から２，３才ごろの急成長に次いで第２の山をなしているのである。(注)$_{1-3}$

図１Ａ　身長の成長
（猪飼他，1967,）

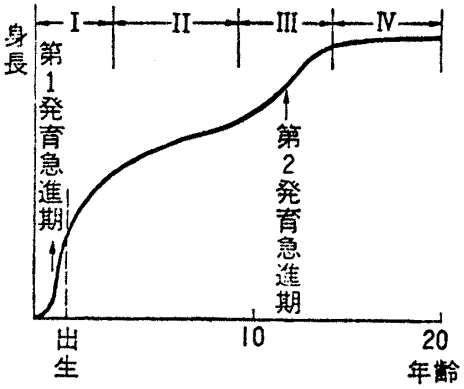
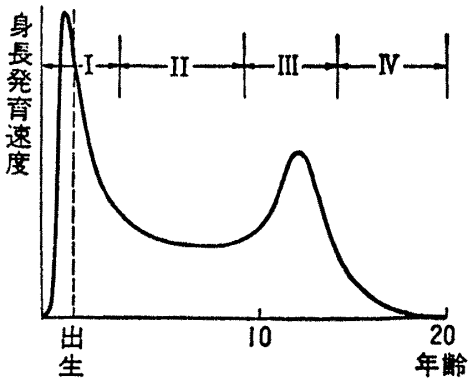


図１Ｂ　身長の年間増加量の推移
（同左）



Ⅰ：胎児期および乳児期
Ⅱ：児童期
Ⅲ：思春期
Ⅳ：成人期以後

しかし，自我意識の発達に最も拍車をかけるのは，それらに伴って表われる「第２次性徴」である。これは生後直ちに認められる基本的，外形的性差を「第１次性徴」とよぶのに対する語で，性ホルモンの分泌によるはっきりした性差である。具体的にいえば男子の場合，精通現象・声がわり・ひげの発生など，女子の場合月経の開始・乳房の発達・骨盤の拡大などがあるが，これらにより，男らしさ・女らしさが身体面にくっきり出るようになると，青年の関心はおのずと性差による体型の変化に向けられる。そして，自分が他人にどう映っているか，周囲の仲間と比較してどうか，ということに始終心をかき乱され始める。他人の前で特に異性の前で，恥をかきたくないという過剰な自意識が，急速な成長による身体的不均衡と相まって「無器用な」(注)$_{1-4}$時代を現出するのである。この無器用さこそ，青年が自分で自分を見始めた自我意識の出現を示すものといえる。

体は大人へと向かっているのに，気持ちの上では児童期の依存心をそのままひきずっている中途半端な自分を見て，この差を埋めようとする焦燥感が青年を支配する。仲間にぐんぐん大人らしい成長を見せている者がいると，自分がそれに比較してみられているという意識で劣等感にうちのめされ，何とか背伸びして自己主張や反論で目立とうとするが，内心につきまとう

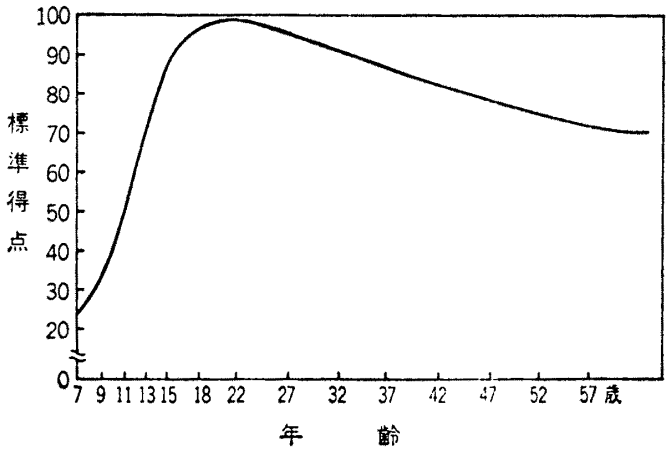
不安や他人への意識過剰でなおさら動作がぎこちなくなる。そのぶざまな困惑を他人に見せまいと，今度は自分の殻に閉じこもり自我への侵害を防ぐ，要するに「見る自己」が「見られる自己」を一々気にし始めるのである。

このように身体的成熟は，これまで外に向いていた目を自分自身に集中させ，特に異性を意識した自己理想化への努力をさせるが，その結果が意に反しアンバランスの無器用さを露呈してしまうのが，自我のめざめの最初の現象である。

第2に，自我意識発達の要因は知能の発達による。

青年期の知的水準は，知能検査やウェックスラーによる知能の発達曲線 **図2** を見てもわかるように，各年代の頂点に達する。これは，生理学によると大脳前頭葉の神経細胞の脈絡が20才前後で完成するためである。

図2　ウェックスラーによる知能の発達曲線



青年の知的発達の特徴の一つは，抽象的能力が発達し論理的思考能力が顕著にみられることである。そのため，青年は現実の具体的な言動の観察を通し，そこに本質的一貫性をとらえることが可能になる。常識の矛盾を指摘し，批判を浴びせる「第2反抗期」の原動力がこれである。

第2反抗期の知能は，第1反抗期の幼児の知能とは比較にならぬほど発達している。それは先ず，生活環境の拡大による交友関係の広がりによろう。交友関係から流れこむ興味ある資料は莫大なものである。また青年は，大人たちと違って生活に縛られていないから，情報収集のため充分時間をさくこともできる。のみならず現代，高学歴化の要求はすさまじい受験競争をあおりたて，知能の宝庫はふくらむ一方である。

知能の発達に伴う自我意識の高揚は自尊心を強め，自信と優越感を増幅する。そのため，青年は他者への厳しい批判を行うが，それは些細な失敗や中傷でたちまち自己への劣等感や失望に変化する脆さとも表裏一体をなしているのである。なぜなら，青年はそれらの膨大な知識が現実にどのような重味や意味をもつものかということを納得するには，まだあまりに生活体験

が浅い。そのため，青年の自負する知識は，しばしば現実遊離の理論だとして大人からひんしゅくを買うことにもなるからである。

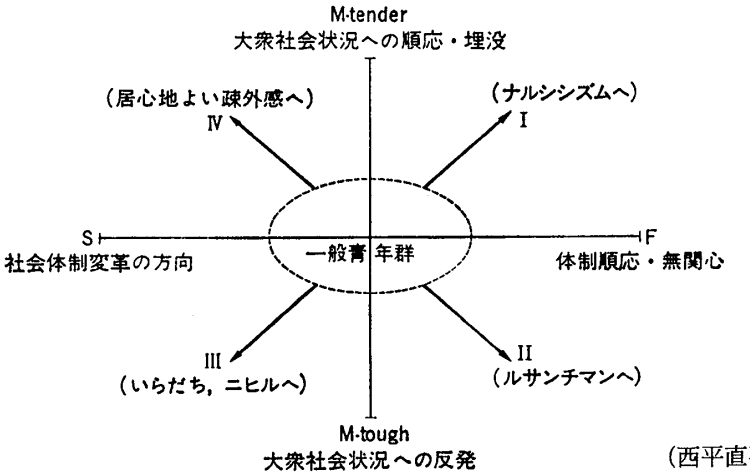
ところで，このような知能による論理的思考と，現実の実態とのくいちがいは，現実生活で起こるのと同様に，青年の心の内部でも葛藤を生じて自我意識の急速な発達を促している。というのは，知能による膨大な情報収集は，多くの他者を自己の内部に取り込むことであって，自己と他者との交流を活発化する。このことは自己が他者を見る機会をふやすと同時に，他者の目で自己を見る機会をもふやすのである。そのため，青年は次第にさまざまな角度からの自己観察へと導かれるのである。

第3に，自我意識発達の要因は，社会的環境の拡大に関連を求めることができる。

青年期になると上級学校への進学により，仲間との交流が拡大するばかりでなく，就職により職場といった集団へまで社会的環境が広がっていく。そして，それぞれの場所で要求される社会的適応性が，自己評価の機会をおのずと増大し自我意識を成長させる。集団の中で愛され必要とされるためには，その集団の型に合わせる努力と，自己の力量を示す競争が必須である。その競争で，効率的打算的世渡りを覚え，社会化していく者も多い。しかし一方には，生まじめな努力にもかかわらず社会に受け入れられなかったり，自己の価値観そのものが社会に否定され，生きていく悩みを抱えこむ青年も多い。

このような意味で，青年の社会への対応を4方向に分類しようとしているのが，**図3**の西平直喜の説(**注**)$_{1-5}$である。いうまでもなく，個人の生き方はこの類型のどれか一つの方向に決められるわけではない。しかし，社会に対する青年の複雑な心理が，ここに極めて理論的に類型化されることは興味深い。

図3　FMS理論にもとづく現代日本青年の生き方——4方向



(西平直喜)

彼は，現代青年の生き方を「体制順応型　F」「体制変革型　S」として二分し，さらに大衆社会状況に対しても「社会適応型　M-te」と「社会反発型　M-to」と二分して4方向に類型化した。青年は常に青年らしいイデオロギーのみでFまたはSを主張しているのではなく，もっと現実的なたくましい功利主義で適応したり反発したりする。これが2つのMである。彼はこのF，S，M-te，M-toの4つを軸として，そのどれをより多く選択するかにより，青年の生き方を類型化した。

これを参考にしながら私見を述べてみたい。

①F……体制順応型の中には，全く無関心で世間の常識にならって生きていくことに何ら疑念をはさまない者もいるが，強い信念をもってこれを是認している保守派もいる。しかしこうした保守的考えは，ともすれば体制への批判力を失い，体制が自己に有利であればナルシシズム(自己陶酔) Iへ，体制が不利に働けばルサンチマン(怨恨) IIへ傾き易い。

②S……体制変革型は，これに対し，批判的・革新的で，積極的に行動する。未来に希望を抱き，社会をよくするために前向きに戦おうとする。しかしこうした理想論は，それが純粋であればあるほど社会と相容れない。そのため，ともすれば現実から遊離し，いらだちやニヒル（虚無）IIIへ，あるいは居心地よい疎外感IVへ流れやすい。

③M-te……柔軟な社会適応型は，理想を云々せず現実生活の効率を第一に考える生き方である。個人生活への損害を極力防ぎ，うまく世渡りできる点で成功者となりナルシシズムIあるいは不成功者となっても居心地よい疎外感IVに納まってしまう者が多い。

④M-to……硬派の社会反発型は，政治や権力に拒否的であるため一見進歩的に見える。しかしそれは個人的利益を守るためで，体制自体の変革を試みるような積極的な反発ではない。そのため，ルサンチマンIIやニヒルIIIへ堕していき易い。

こうしてみると，青年は一方では社会に受容されることを望み，それに自我を適応させようと努力することにやぶさかではないが，他方では理想を目ざし体制革新を試みる努力も惜しまない。それにより自我意識は広い活路を見出し，仲間との連帯感や社会への使命感に支えられて発達を遂げていく。

しかし同じ社会への反発を試みる場合でも，これがイデオロギーに支えられていない場合には，単に社会を自分にひきつけようという努力に終始することになる。いわゆる青年期に多い自己顕示欲の表われで，わざと奇異な行動に出たり，過激な主張で人々の注目を浴びようとする心理である。社会に受容されない青年同志が集団を組み，彼らだけに通じることばや服装，あるいは特別な規則などをつくって，仲間意識を高揚したり，疎外された不満を爆発させたりする，いわゆる暴走族や不良グループなどがそれである。しかしこうした行為は，青年がたとえ小人数でも自己を受け入れてくれる仲間を渇望している表われであり，他者に認められることが青年にとっていかに重要かを証明している。不安定な反社会的グループの中での承認は，

やがて社会的修正を加えられる過渡的現象ではあるものの，この期に一生を誤る事件にまきこまれる者も多い。それにつけても大人社会が「疾風怒濤の時代」(注)$_{1-6}$といわれるこの時代の青年期の心理をもっと理解し，自我の形成過程を暖かく見守っていきたいものである。

3　自己の肯定と否定

疾風怒濤といわれる青年心理の特徴を表わすものとして「アンビヴァレント」(ambivalent) ということがよくいわれる。これは「両極性」とも訳され，愛と憎・尊敬と軽蔑など相反する感情を同一の対象に抱くことで，青年の危機的心理状態をよく表わしている。自己評価についても同様，自分を高く評価し，肯定したかと思うと，全面的に否定し自暴自棄に走ったりする。

青年の自我意識は先ず自己肯定の形で顕われる。青年は新たに発見した自我を唯一の心理的実在として愛し，これを根拠に価値観を展開する。そのため家庭ではこれまで従順に受けていた親の庇護を拒絶し，「一々干渉しないでほしい」と独立宣言を発するばかりか，逆に親の生活態度に批判の矢を向け，親子関係に亀裂を生じさせる。**表1** はその年令と反抗の二大原因である。(注)$_{1-7}$

表1　親に対する反抗の原因（%）　　（依田新による）

反抗の理由	学年 / 性別	7	8	9	10	11	12	13	計
自由の侵害	男子			67	45	43	49	44	51
	女子	76	61	66		46			61
批判的態度	男子			29	36	50	46	52	41
	女子	16	35	34		38			31

7学年は，中学1年に準ずる。

また一歩外に出て社会の集団に入ると，その中で自己の地位を確立し，自我を安定させようと自己顕示欲をあらわにする。先にも述べたが，わざと奇異な行動に出て人々の注目を集めたりしようとするのである。この目立ちたがりやの青年期を，ハーロックは「見せびらかしの時代」(注)$_{1-8}$と名づけた。このように自己肯定の強い青年は，自信や優越感が強く，時に傲慢でさえあり，そのためにしばしば周囲の反目や蔑視の対象となることが多い。

青年は周囲の反応に決して気づいていないわけではない。青年の知的水準の高まりは，児童期までのように楽天的に自己を肯定することを許さない。そのため，理想像に対する現実の自己の低劣さを嫌悪し悩むのも，また青年心理の重要な側面といえよう。自己不満は自己否定となり，青年期の危機的様相をいっそう強める。劣等感や自己蔑視を強めた青年は将来の可能性が信じられず，自暴自棄になり，生命さえ否定する者も現われてくる。

しかしこうした不安定な行動は，自我観念の不確かさからくるもので，自我は決して消失してしまったわけではない。ビューラーによれば，「17才ごろを境として青年は洞察力によって

欲求の調整が可能となり，行動は安定へ向かう」(注)$_{1-9}$という。さまざまな煩悶のあげく，ようよう一つの人生観に到達するのである。あまりにも理想主義的であったために，自己の全面的否定にまで傾かざるを得なかった完全主義から脱け出して，理想我と現実我の調和点を発見する。自己を特に過大視したり過小視したりせず，自分に与えられた長所短所をそのまま受け入れて自分の人生を築いていこうとするが，こうして自我がようやく明確化し安定化するのは青年期も後期である。

4　自我の確立

自我の確立は青年期の課題であるが，青年期においてのみ完成を期せるものではない。したがって，青年期の課題としてここに述べようとしている「自我の確立」の意味も，自我が完成される時期という意味ではなくて，確立へ向かってかなり強固な人格形成の基盤をつくる時期という意味である。この「自我の確立」をエリクソンは「アイデンティティー」(identity)という概念の中で提唱した。(注)$_{1-10}$

アイデンティティーの訳語としては，「同一性」とか「主体性」とかがよく用いられる。青年期は児童期までの価値体系に疑念を抱き，自分の判断と責任で真に自覚的・主体的に価値を再構成しようとする時期なので，これらの訳語には理想とする価値へ向かって自我が自ら同一化しようとする姿勢が示されているのである。しかし一方で，青年期は見る自己と見られる自己との分化から，自己の生き方をめぐり大きな動揺を示す時期でもあって，アイデンティティーの意味も，単に「同一性」とか「主体性」だけでは盛り切れないさまざまなニュアンスが含まれる。

青年が「自己とは何か」と問いかけた時，この「自己」は，過去・現在・未来を縫ってさまざまの経験をしながら成長していく自己である。しかし，いかに成長し変わっていこうと，その中には本質的に連続し不変である自己がある。流動するさまざまの状況の中で，各々の役割を果たしながら，その核心には「自分はこうである」「自分はこのように生きていく」という主体的に一貫した自分らしさがある。「アイデンティティー」とはこうした自己の状態をいうのである。また「自己」といっても個人の一貫性だけを問題にしているのでなく，集団への帰属感やそこでの役割感をも含んでいる。たとえば，「○○大学の学生としての自己」「○○会社の社員としての自己」という場合がこれである。さらにその帰属感・役割感をもった自己は，意識的なものから無意識的なものまで含まれ理想と現実のはざまで揺れ動いている。このように時間とともに成長しながら，また集団所属の中で役割を果たしながらも自分らしさを保持している自己，それが「アイデンティティー」なのである。アイデンティティーにはこのように，一人の実存する人間としての複雑な要素がからみ合っている。

ここにエリクソンの「漸成理論図」**図4**を参考に，アイデンティティーの発達過程をみてみよう。(注)$_{1-11}$

図4　エリクソン，E.H.の精神発達の漸成理論図（epi-genetic chart）（西平）

								(死へのレディネス)
Ⅷ成熟期								統合性 対 嫌悪・絶望
Ⅶ成人期							生殖性 対 自己吸収	
Ⅵ初期成人期					連帯感 対 社会的孤立	親密さ 対 孤立		
Ⅴ青年期	時間的展望 対 時間的展望の拡散	自己確信 対 自己意識過剰	役割実験 対 否定的同一性	達成期待 対 労働麻痺	アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散	性的同一性 対 両性的拡散	指導性の分極化 対 権威の拡散	イデオロギーの分極化 対 理想の拡散
Ⅳ学童期		↑		生産性 対 劣等感	労働アイデンティティ 対 アイデンティティ喪失			
Ⅲ遊戯期	(その後のあらわれ方)		主導性 対 罪悪感		遊戯アイデンティティ 対 アイデンティティ空想	←(それ以前のあらわれ方)		
Ⅱ早期幼児期		自律性 対 恥・疑惑			両極性 対 自閉			
Ⅰ乳児期	信頼 対 不信				一極性 対 早熟な自己分化			
社会的発達 / 生物的発達	1 口唇期 oral	2 肛門期 anal	3 男根期 phallic	4 潜伏期 latent	5 性器期 genitality	6 成人期 adult	7成人期 —	8 老熟期 —
中心となる環境	母	両親	家族	近隣・学校	仲間・外集団	性愛・結婚	家政・伝統	人類・親族
virtue 徳	hope 希望	will 意志力	goal 目標	competency 適格性	fidelity 誠実	love 愛	care 世話	wisdom 英智

エリクソンは乳児期から成熟期に至る人間の生涯を8つの段階に分けて，社会的発達と生物的発達に心理的発達過程を組みこませ，それぞれの段階で解決されなければならない発達課題を図示した。

対角線上に示されているのがそれぞれの段階の発達課題で，それと対示されているのがその時期に陥り易い危機的状況である。たとえば生物的に口唇期に当たる乳児期は，母親の愛情深い働きかけによって人間的信頼が植えつけられることが最も重要な発達課題である。乳児はさまざまの不安にさらされているが，もしこの不安を母親が放置するとしたら，彼は信頼を得る代りに人間不信という危機的状況に立ち，将来の人格性が歪められるであろうことをこの部分は示しているのである。

人間の成長にとって，失敗や挫折はつきものであり，なかでも青年期は最も過敏に反応し易い時期であるため，わずかな動機でもひきがねになってこの危機的状況に陥る。しかし，この危機をのりこえることにより人間は内的な活力即ち，希望から始まり英智に至る「徳」(virtue) を形成していく中に，次第に自我の強さがつくられるのである。

では各成長段階の課題が無事に果たされず，それと対立した状態に陥るとどうなるのだろうか。エリクソンは発達課題に対示される危機的状況を「同一性の拡散」ということばで示し

た。「拡散」とは，そのことば通り，気持ちの統一ができず，一時的に広がり散った心の状態である。不満や不成功などにより，どうしても周囲の価値と同一化できず，自分が社会から浮き上がってしまったような心の状態，自分というものの焦点がつかめず自信を失い，神経衰弱に陥ったような状態をいう。しかしいかに心がバラバラになろうと，扇の要である自己まで失われたわけではないから，この状況が解消されればさらに大きな人格へ飛躍することも可能なのである。

拡散状況は先の「発達漸成図」に示されているように，それまでの成長過程でのつまづきが青年期に集中して現れることが多い。たとえば過保護や過干渉の中で「いい子」として育ってきた青年や，厳しすぎあるいは放任しすぎの家庭の子が，主導性を取り戻そうとして思いがけない反抗を示したり，社会の価値体系とは逆の，たとえば不良グループのようなものと同一化する「否定的同一性」に陥ったりする。これらが各期課題の未修得を原因とする現象なのである。

このように青年期はアイデンティティーの重要な形成期であると同時に，また危機期でもある。これは，人間が肯定的自己像に達するために避けて通れない過程である。

第2章　自我の充実と価値観

自我意識のめざめは，必然的に自我のあり方，即ち自己の生き方への模索につながる。また自己の生き方への模索は即ち人生の価値の選択，価値観の問題に他ならない。第2章では自我の充実につながる価値とは何かを，現代青年の欲求と結びつけながら考えていきたい。

1　同一化と価値観

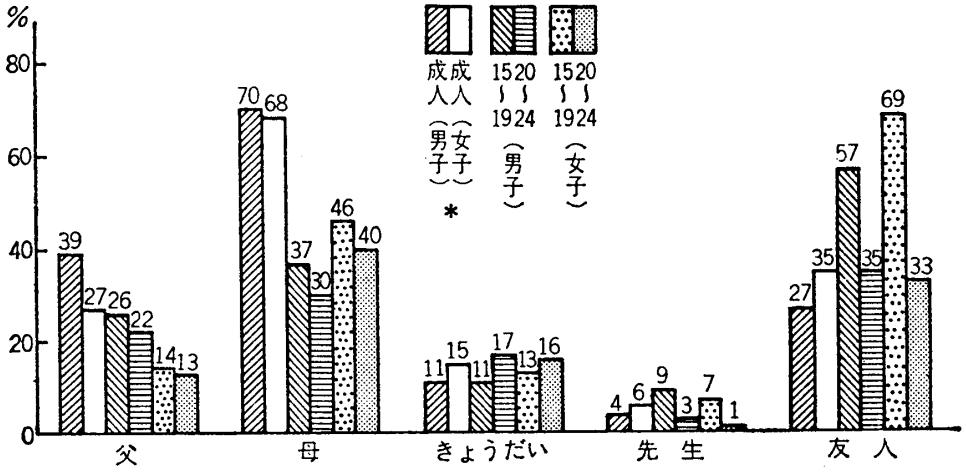
「同一性」(identity) と「同一化」(identification) とは，語幹を等しくしているところからみても非常に関係が深く複雑に入り組んでいる。しいてこの差異をいえば先述の「同一性」は人格発達の「形成過程とその成果とを統一的に示そうとすることば」であるのに対し，「同一化」はその「過程における中心的なメカニズムを意味する」(注)$_{2-1}$ことばである。つまり「同一化」ということばには，成果より過程に重心がおかれているといえよう。したがって「同一性」は「これが自分だ」という自覚的主体的色彩が強く打ち出されるのに対し，「同一化」は環境からの影響を無意識的にとり入れるような場合が多い。

「同一化」とは「同一視」(注)$_{2-2}$ともいわれるフロイトの提唱した概念であり，他者の性格や特徴をあたかも自分のものであるかのように，知らないうちに取り入れることである。たとえば，子供は親と一緒に生活していると，知らず知らずそれを模倣し，性格や行動特性まで親に似てくる。このように，同一化とは自己にとって重要な他者を手本とし，自己が変えられて

いく心理過程をいうのである。他者を手本にするとは，他者にある価値を見出すことであり，そこには当然他者への心情的結びつきが認められる。これは「いかに生きるべきか」「何を価値とみるか」という心理と重なり合うもので，心情による価値の選択ともいえるのである。

青年期になると，同一化の対象は次第に外見的・形式的なものから，より本質的な，内面的・精神的なものへと移っていく。また，身辺的人物だけでなく，交際や読書により対象はより広くなり，歴史上の人物や架空の人物にまで及んでいく。これまでの親や教師に対する信頼は，青年期に入ると表面的にはむしろ反発にかわる。そして**図5**のように，悩みの相談相手なども友人を選ぶようになる。(**注**)$_{2-3}$これらは，知的関心が広がり人をみる目も深まって，両親の欠点などが見えてきたための現象である。

図5　青年の悩みの相談相手



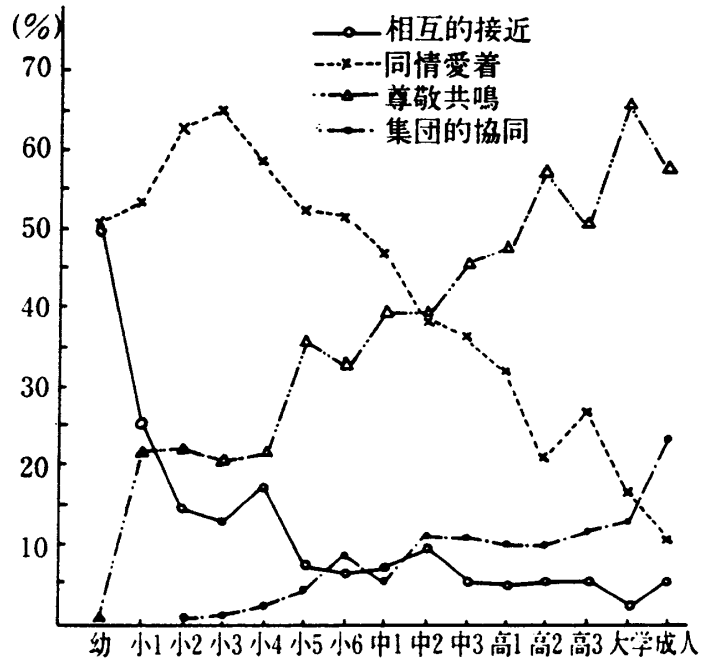
注）＊成人(25歳以上の既婚者)が青年について抱いている意識を示す。

[総理府『青少年の連帯感などに関する調査』，1976.

同一化の対象として友人は大きな意味をもつ。両親の愛情がかえって煩わしく，何とかして干渉を脱したいと願うようになるのは，自立心の高まった青年一般の心理である。しかし，自立への道を歩き出すには，青年の自我はまだ弱く終始不安にさらされている。その不安の解消のために青年は先輩や友人に心を開き，悩みをうちあけるのである。

青年期の友人は，児童期のそれのように単なる遊び仲間ではないから，表面的な妥協的関係では満たされない。上からの権威を排除し，自らの力で真実を探ろうとする青年が友人を選ぶのは，その友人の人間性にどこかひきつけられるからである。このことは，田中熊次郎の「友人選択理由の変遷」の**図6**をみても，青年期の友人の殆どが，「尊敬共鳴」を理由として選ばれていることでもわかる。(**注**)$_{2-4}$友人と夜を徹して議論をたたかわしたり，音楽鑑賞をしたりするのもこの時期で，それが多少現実遊離であろうと価値観形成に果たす友人の役割は大きいのである。

図6　友人選択の変遷 田中（1975）



次に，異性との同一化の場合を考えてみよう。第2次性徴は生理的な面と同時に，心理的にも青年を内部から大きく変革していく。異性の友人をもつようになった動機を**表2**でみると，相手に対する自己の性役割を強く期待している様子が伺える。(**注**)$_{2-5}$しかし，初めは自我意識が邪魔をし，強い羞恥心や不自然な反発心などで同一化を形成することはできない。ただし現代の開放的雰囲気の下では，このような心理が大分稀薄になってきているように思う。

表2　異性の友人をもつようになった動機（総理府，1971）

動機・理由	容姿が気に入った	話に心を打たれた	さびしかった	相手の誠実さに打たれた	男らしさ女らしさに引かれた	その他	特に理由は明確でない
割合(%)	6.3	10.9	3.0	17.8	11.2	68	43.9

異性との同一化が最も明確にその姿を表わすのは，「恋愛」とよばれる状況である。恋愛により，青年は自己の性役割をいっそう強く認識すると同時に，相手に近づきたい欲求から，自己の長所や可能性を最大限に発揮しようと努力する。のみならず相手の人格の長所を吸収し，自我を拡大する。さらに相手の人格と一体化して相手を独占しようとしたり，献身的奉仕を惜しまなかったりする。つまり，恋愛による自我の拡大とは「他者が自我の一部になる」ことであり，失恋の痛手とはこの「自我の一部を喪失する」痛みだといえるのである。(**注**)$_{2-6}$このように恋愛は性的欲求だけではなく，自己の人格的不足を異性とのふれ合いにより充足しようとすることなのである。これらの同一化を経ながら，青年は価値観を高め豊かな人間性を築いていく。

2　価値意識の発達

生理的欲求にしか価値を感じなかった乳児が，一人の人間として深い人生観や価値観をもつに至る過程は，身体的成長や自我意識の発達と密接な関係をもつことは当然である。したがって，ここでは前述との重複を避けながら，特に価値意識の一般的形成過程を各期ごとに要点をしぼって述べていきたい。

(1)　乳幼児期

生後3才ごろまでの乳幼児の世界は，家庭を中心とした狭い世界に限られ過去も未来もない。ただ目前の具体的・断片的な関心だけに繰られている。したがってこの期の価値とは，生理的欲求を充たす「快」であり，そのため母親の存在と支持が重要な関心となる。

3才を過ぎて言語も歩行も可能になると，近隣の子供たちとのつき合いに興味がいく。そのため，両親への依頼度も大分減少し「第1反抗期」とよばれる自己主張が始まるのである。

しかし一方では生活の広がりとともに未来への想像力もふくらむから，大人の価値基準に関心をもつようになり，この機会を利用して基礎的生活習慣がしつけられる。フロイトによれば，親のしつけは幼児に「超自我」(注)$_{2-7}$を形成し，この超自我から罪悪感が生じて欲望が管理されるようになるという。この意味で，幼児の価値観の目は，親のしつけにより開かれるといえる。

ところがこの期はアニミズムの時代でもある。アニミズムとは無生物にも人間的感情があると思う幼児特有の自己中心思考である。したがって，この期の幼児の欲求は，善悪という観念よりも情緒性が優先すると考えねばならない。つまり，人間の良心ともよぶべき「超自我」は，厳格なしつけにより強まるというより親との同一化，即ち親をモデルにすることによって強まるので，賞罰はその補助だということである。厳しすぎる賞罰は，かえって与えようとする価値への反抗心をあおる場合さえある。

(2)　児童期

児童期は就学により集団生活に入り社会的承認が必要となるため，すすんで集団の習慣に従おうとする時期である。この期は，他律的に「よい子」になることが最も重要な価値であることと考える時期であり，幼児期につづいて賞罰により社会の価値観が与えられる。

ところが児童後期になると，主観的傾向から次第に脱して科学的興味が出てくる。これまで空想の世界に描いていたロマンは消失し，価値も客観的に証明できるものしか認めないようになる。

(3) 青年期

青年期に入る中学生ごろになると自我意識が発達し，これまでの「よい子」としての価値をふり捨て，個人の判断に基づいて善悪の判断を下すようになる。親や教師の教えに盲従するのでなく，彼らと対等のレベルで考え批判しはじめる。友情・恋愛・人生の意義などについても思い悩むことが多く，即物的観察から一歩出て，精神的意味を深く考えるようになってくる。友人を限り，家庭を避けて，孤独の殻に閉じこもる内向的性格が強まるのもこの頃である。

この期の身体的変化は青年を不安にし，自我意識と平行して他人意識も強めるので，劣等感から自己否定に傾き易い。価値に対しても合理的に納得しようとするが，それは多分に主情的体験で彩られている。

青年中期の16，7才ごろになると自我意識はさらに内面化し深化する。それだけに理想と現実のギャップも大きく，その溝を埋めるために特殊な人物との同一化によって自我を方向づけようとしたり，読書により思想を体系化しようと努めたりする。**図7**のように，神仏に対する懐疑を最も強く抱く時期でありながら，**表3**のように入信者が最高になっているのもこの時期である。(**注**)$_{2-8}$

図7　自分と神仏への信頼の比較
(鈴木清による)

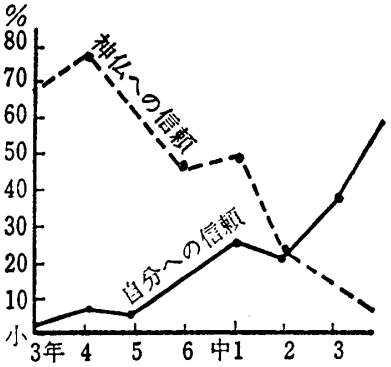


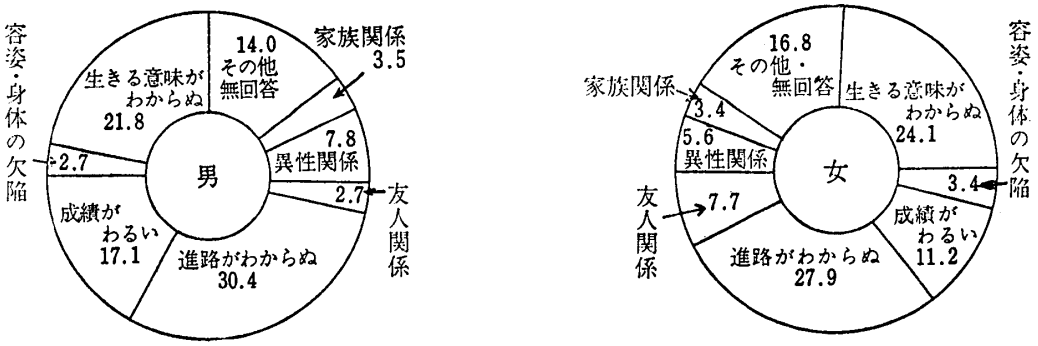
表3　入信の年齢（今田恵による）

研究者	年齢
柳原貞次郎の研究	男女とも18歳が最高
石神徳門の研究	男17歳　女子15歳が最高
海老沢亮の研究	男18歳　女子17歳が最高
今田恵の研究	受洗平均年齢18歳9カ月
イターバックの研究	平均年齢16歳4カ月
コーの研究	平均年齢15歳4カ月

こうした過程を経て，青年後期はようやく両極的傾向が和らげられ，理屈を越えた心情や態度で人格のふれ合いに価値をおくようになる。これは先述のように「徳」が備わっていったためである。「徳」を得ることのできた青年は，この内的活力により，外部的・内面的対立状況を衝動的にではなく調和融合して考えられる段階に入っていく。

このような過程をみると，幼児期の他律的価値観が青年期の自律的主体的価値観へ推移し，しかも調和的に体得されるさまは，あたかも体系化された価値観が年代毎しぜんに体得されるように見えるが，価値の内面化への過程は決して容易ではない。このことは**図8**をみても「青年の悩み」の上位が「生きる意味」や「進路」即ち人生観の模索で占められていることでもわかる。(**注**)$_{2-9}$

図8　青年の悩み



（朝日新聞　1969. 11. 20より）

特に現代の社会は，一方で価値の多様化が進行しながら，一方で管理体制がすすんで人間を規格化しようとしている。この相反する二つの社会の様相は，青年にとって「価値観」の樹立をいっそう困難にしているのであろう。即ち多様化という点では，かなり個性的な価値を社会が受容するように思えるが，それには規格化への動向に逆らわねばならない。この矛盾にどう対処して自我を確立するか，という悩みがつきまとう。人間が社会性をぬきにしては存在できないということは，人間の求める価値そのものが社会的承認を得られるもの，換言すれば人間心理の根底で，だれでもが求めているものでなければならないことを示している。したがって，規制されることのみにおびえ，孤立化し自閉的になったり，他者の多彩な生き方だけに心を奪われ自己を失ったりした青年は，アイデンティティーを確立することが困難になってしまうのである。

3　価値と欲求

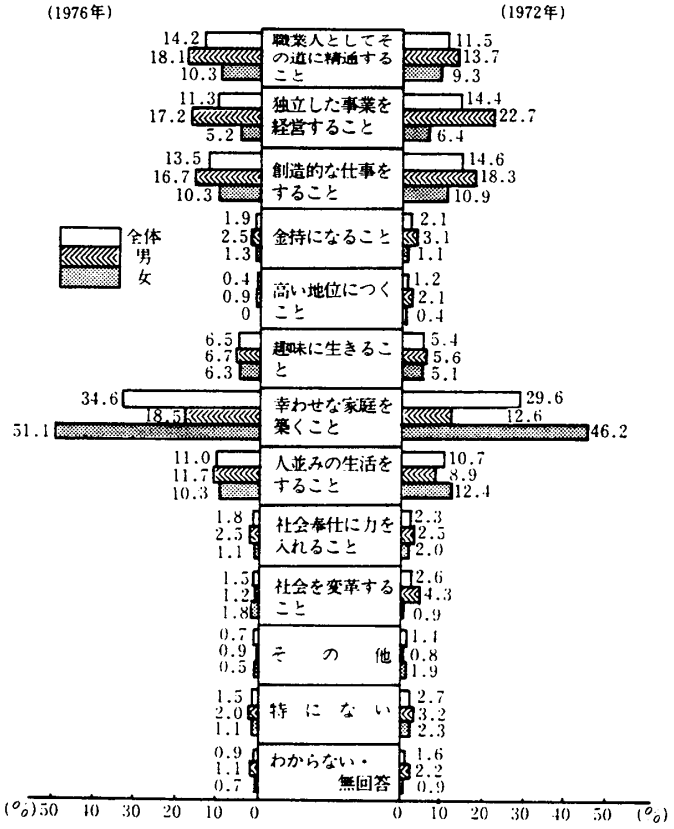
価値とは，通常，物事の行動やできごとなど，客体に備わるねうちと考えられている。しかし，そのねうちを感じとれるか否かは人によって著しく異るところである。また一口に価値といっても，その内容には経済的価値・芸術的価値・論理的価値・宗教的価値などさまざまな分野が考えられるが，ここでは心理学的な意味で自我の存在を充足させる価値，生きていく上で心の支えになるいわば「生きがい」に当たる価値だと限定しておきたい。

人はそれぞれ具体的状況の中で，さまざまの制約を受けながらも，価値を実現していくことにより生きがいある人生をと無意識のうちにも願っている。自我意識にめざめた青年にとっても，人生は単に運命的，受動的なものではなく，主体的な価値の選択によって展開していくものである。

初めに述べたように，価値は客体に備わるねうちでありながら，主体とのかかわりなくしては決定できないものである。つまり，主体のもつ価値観によって，いかようにも変化し得るも

のなのである。それは，幼児にとって大人の服は不要であり，目のよい者にとってめがねは邪魔であるというような，常識の範疇のことではなく，生き方の問題である。たとえば，他人には何の価値もないどころか，むしろ嫌悪すべき動物をわが命のように愛しんでいる人がいる反面，万人共通の価値とさえ思われる金銭に殆ど無頓着な人もいるというように，主体の，知的・感情的・意志的なものを含めた全人的欲求を充たし得るものが，その人にとっての価値なのである。

図 9　人生の目標（18〜22歳，男女）（NHK 放送世論調査所「青年の意識」1976）



では，現代の青年はどこにこの価値をおいているのだろうか。**図 9（注）**$_{2-10}$を見て第一に目につくのが「幸せな家庭」に人生の目標をおく者が多いことである。次に「創造的な仕事」「独立した事業」「精通した職業人」などの希望が目立ち，「人並みな生活」を望むじみな目標もかなりなウェイトを占めている。これだけでみると，日本の現代青年の価値観は足が地についていながら一方では，なかなか野心的で非常に有望に感じられる。しかし「社会奉仕」「社会変革に対する関心の乏しさ」は何を意味するのだろうか。掘り下げて考えると，これは「他人のことにかかわり合いにならないで，自分の家庭だけは平穏を守りたい」とする一種の個人主義的考えであり，創造的な仕事などというのも，そうした個人主義的な欲求の延長線上にあるような気がするのである。

では，価値と欲求とはどうちがうのだろうか。

現代の青年は経済成長のまっ只中に生まれ，好むと好まざるとにかかわらずその恩恵の中で

育てられた。次々に現れる機械の新製品，車の新種，グルメ，海外旅行等，巷にはそれらの宣伝がいやが上にも物質的欲求をあおり立てる時代である。しかし，こうした外部依存の欲求はいくらとり入れても外部の事情が変わればたちまち欠如感を生じるような陥穽を用意している。これさえあれば幸せになれる，あれさえあれば充たされる，と飽くことなく追求するさまはいかにも活動的であるが，それはそうして駆りたてねば空虚でいられないような焦燥感からくるものであって，このこと自体，既に今日の飽くなき欲求の追求が，人間の生きがいとも価値とも結びつかなくなっている証拠ではないだろうか。それは自我の中核にかかわる本質的欲求とは離れた周辺的欲求にすぎない。

価値は自我形成の原動力ともいうべき理想であって，実生活上一時的に便利とされるものとは違う。確かに便利で快適な生活に生きがいを見出す価値観もあろう。特に今日，主体と客体との相関関係で，多様な価値観はいくらでも成立するという見方からすれば，そのいずれをも価値と認めねばなるまい。しかし，究極的にそれが人生の生きがいと結びついているか，そこが問題なのである。

そこで現代青年のこの価値観を万人の願いである幸福感と結びつけて考えてみよう。

我々が一般に幸せという時，その内容は何をさすだろうか。先ず健康であること，ある程度の経済的支えがあること，家族，友人などとの交流があること，趣味や楽しみがあること，これらはだれもがいう所であり，それだけに実感を伴っている。先の表でみた「幸せな家庭」「人並みな生活」とは，おそらくこうしたことをさすのであろう。しかし，これらの幸せは，非常に個人的な願いであり，いつ奪われるかしれない脆さをも持っているのである。個人の殻の中だけの幸せ，現在だけ手に入れている幸せが果してほんとうの「幸福感」「生きがい」とよべるだろうか。

世間には，いかに巨万の富を積み，位人身を極めても，生きがいを感じられず悶々とする人がいるかと思えば，不治の病にたおれながら生き生きと余命を充実させている人もいる。ここに幸福感というものの２つの方向をみることができる。

一つは，即物的満足を求める極めて現実的な幸福感，一つは精神的満足を求める実存的な幸福感である。前者は安易な消極的享受であり，後者は生気に充ちた積極的獲得である。この二つの側面について，R.May(注)$_{2-11}$は前者を快適感 to have の幸福，後者を充実感 to be の幸福と区別している。即ち，前者の to have は，いかにして持つかを問題にする所有の欲求であり，後者の to be は，いかにして生きるかを問題にする生命への欲求なのである。両者の幸福感は，次元を異にした欲求から成る。つまり，前者の幸福感は「もし……なら」という条件付きの上で成り立つが，後者は無条件で，自己の意志のみで獲得できる幸福感なのである。人間の生活は欲求を中心として営まれ，幸福感も生きがい感もその上に成り立つものである。したがって，だれしも多少の差はあれ，そのための努力は払っている。ただその努力が，単に習俗への隷属にとどまるか，人間として豊かに生きようとする主体的自覚をもつか，という所に岐点がある。私はここにこの２つの幸福感を対照的に整理してみた。

2つの幸福感	
生活の快適感の追求	生命の充実感の追求
自我の周辺的欲求	自我の中心的欲求
所有の欲求　to have	生命の欲求　to be
生物的	精神的
現在的	未来的
個人的	社会的
習俗的	主体的
困難への回避	困難に挑戦
虚無的	感動的
しあわせ感	生きがい感
相対的価値	絶対的価値
欠如感	成長感

4　価値の本質

青年は人生観を形成するにあたり，生きがいを追求する。生きがいは，確かに幸福感の一つだが，単なる「しあわせ感」，生活の快適感ではない。このように考えていくと，自我の形成に不可欠な「生きがい」とは，生命の充実につながるような幸福感であり，人生で最も重要な価値だということがわかってくる。そこでこの「生きがい」ともいうべき価値の本質を，次のような3つの点から考えてみたい。

第一に，生きがい感には「独自性」が必要である。

生きがいとは，実に個人的感動であると思う。たとえば，我々が子供や趣味が生きがいだという場合，本人にとってはそれが生命の支えとなる重大なことであっても，子供のいない人あるいはその人の趣味に全く興味がない人からみれば，何ら感動を覚えないことである。神谷美恵子は，「生きがいとは，他の人間にはとってかわることのできない，その人自身の内面の感動である。それは，物質的所有の満足とは異質で，持続的な深い感動でなければならぬ」(注)$_{2-12}$といっているが，この意味でも生きがい感は，その人独自のものと思える。自我確立の作業がだれにとっても必要なのは，めいめいがかけがえのない存在として独自の価値観を構築しなければならないからである。

青年の生きがい感は，自我感情に密着しているものである。その人だけの感じる喜び，その人でなければ得られない充実感だからこそ，フランクルの問う「自己の存在の意味」(注)$_{2-13}$を

確認し得るのである。この独自性を奪うことは，生きがいを奪うことであり，人間としての生き方を否定することである。

たとえばある青年に，ギリシャ神話のシシュフォスのごとく，ころがり落ちる大岩を，際限なく山頂へ上げる作業を課したとしたらどうなるだろうか。おそらく特別な事情がない限り，そんな仕事は放棄したがるにちがいない。青年は，少くとも自分なりに納得できる生きがいなしには，生を肯定することができない。

このことは，単に機械的な単純作業を職業としている若者が，あるいはただベッドに寝たきりで日々を送っている老人が，生きがい感を持てないという意味ではない。どのような状況でも，そこにその人がその人なりの独自性を切り拓き，自己の存在価値を納得できれば生きがい感を持つことができるという意味である。

第二に，生きがい感には「普遍性」が必要である。

フロムはいう(注)$_{2-14}$「主観的快楽経験は，それ自身において充分な価値ではない。……幸福は善と結合する。これを評価するには客観的価値基準が存在する」と。これはおそらく，先述の「生活の快適感」のみを追求する「しあわせ感」に対する指摘であろう。普遍的価値は，単なる快楽や自愛に基づく行為には存在しない。たとえば単に効率的に金を得るためにだけ働く場合，生活への適応性は認めても，価値を追求しているとはいえまい。家族への深い愛や，仕事への誠実さがある時，その行為には普遍的価値が存在するといえるのである。

「生きがい」の根底にある価値が，独自性にとどまらず普遍妥当性を必要とすることは，どのような人間の生活環境，精神活動も，無数の人々の働きと呼応し合って成り立っている事実をみても明白である。先の単調な仕事にたずさわる若者にとっては，会社が賃金を払っても自分を必要としている事実が，社会からの受容を感じさせ，生きがいとなったであろうし，ベッドに寝たきりの老人にとっては，家族や看護人の励ましが周囲からの受容を感じさせ，生きがいと結びついたであろう。このように一見気づかれない周囲からの信頼や愛が，実は個人の生きがいと深くかかわっているのである。

特に青年は，自分独自の些細な行為でさえ，ひそかに共鳴者を期待している。共鳴者によって，自我は社会に開くことができるからである。独自性はいつも社会的承認を期待し，そこに自己実現の場を得ようとしているのである。学校や職場であまり目立たぬように見える人にも，何人かの理解者はいるものである。その人たちによって自己の存在価値を信じていられるからこそ，青年は生きがいを保っていられるので，もし「お前はバイキンのような奴だ」とか「お前の代わりのものはいくらでもいる」などと言われれば，その罵言は彼の存在，ひいては彼の人生全体の否定につながり，自殺者が出ても不思議ではない。社会的不承認は，彼の独自性まで閉ざしかねないのである。

しかし，真の独自性は決して普遍性と相反するものではない。独自性は創造力の発露であり，創造力は必ず人の心を動かすものである。たとえば，あまりにも独創的なために生存中人々にかえりみられなかった芸術家が，死後多くの共鳴者を得，永久にその名を残すのをみて

もそれはわかる。

第三に，生きがい感には「未来性」が必要である。

特に青年の求める価値は，未来へ向かって開かれるものでなければならない。この場合未来性とは，単に個人の将来性のみをいうのではなく，もっと広い視野からみた未来への可能性をも含んでいる。たとえば，念願の新車を入手しても，そのことの先に何の意味も見えてこなければ，未来性があるとは言えまい。それに対し，現在欲しいものを何も入手できなくとも，この技術をマスターして将来自分の職業としよう，などという希望がもてる青年には，未来性をみることができる。個人的現在的欲望が，いくら追いかけても際限なく，結局は空虚感に辿りつく理由，それは社会や未来へ向かって開くべき自己実現の扉を，自ら閉ざしてしまうことにあるのではなかろうか。それにひきかえ，未来性は，死期が目前に迫っている老人にも認めることはできるのである。即ち彼の肉体には限りがある。しかし，彼の死後そこに彼の意志や理想を尊んで引き継いでいくべき人がいるとしたら，その老人の心には未来への展望があったといえるのではないだろうか。

以上，自我の形成にとって重要な価値の本質を，私は独自性・普遍性・未来性にしぼり，生きがい感もそこに生じると考えた。独自性とは，ただ周囲に迎合同調するのでなく，自我の中心的欲求である個性を発揮することである。普遍性とは，独自性を個人的満足にとどめず社会の中に生かすことである。そして未来性とは，現在の幸不幸を越えたところにある未来への展望をもつことである。

では青年にとって，こうした生きがい感の扉をあける鍵とは何だろうか。それがエリクソンの「漸成理論図」に示されている所の「徳」ではないかと思う。エリクソンは一生の各成長段階ごとに発達課題があるとしたが，そこには必ずその期特有な危機もあることを強調している。信頼・自律性・主導性・生産性の課題を達成してきた過程には，それと対立する不信・恥・疑惑・罪悪感・劣等感などの危機との葛藤・克服があった。しかしそれらを克服したことによってhope（希望・期待），will（意志力・決意），goal（目標・目的性），competency（適格性・自信）などの内的活力を獲得したのである。エリクソンのいう「徳」とは，このように葛藤を経ることによって得られる生き生きとした人間らしい人格をいうのである。もしこの葛藤を経ずに成長すれば，ひ弱な人格として後に問題をひきずっていき，青年期の「同一性の達成」の課題を困難にする。即ち「希望」という活力が備わらなければ，時間的展望がもてないから，なげやりとあせりの感情に弄れる。「意志力」という活力が備わらなければ，自己確信が持てず，虚勢を張って劣等感をかくそうとしたりする。「目的性」という活力を欠けば，社会的役割をになうことができずあえて反社会的行動に傾き易いし，「適格性」という活力を欠けば，達成への期待感がもてず，何をやっても空しいという気分に陥り易い。このように青年期に至る成長過程をみても「徳」が内的活力となって生きがい感を支えていることがわかる。

では青年期以降の「徳」は生きがいとどう結びつくだろうか。fidelity（誠実・忠誠）love（愛・慈悲）care（世話・配慮）wisdom（英知・知恵）などの活力は，青年期の頃に確立され

た自我をより広く社会的に，より深く人間的に発展させてゆく活力である。もしこれらの活力が乏しければ社会の中で「自分はこうである」「自分はこのように生きていく」という主体性を貫くことができず社会的孤立の中で，人生の価値さえ信じられなくなるだろう。

このように，生きがい感は「徳」という内的活力によって独自性，普遍性，未来性への扉をあけ，人生の本質的価値に迫ることができる。主体的自我を確立させるのも，他者との連帯感，一体感によって孤独な自我を社会や永遠と結びつけるのも「徳」なのである。人生の出発点である乳児期において基本的信頼を獲得し，「希望」という活力を得た者は現在の苦しみと戦うことや，他者の苦しみを背負うことをいとわず，かえってそれを自己の存在の意味を深める生きがい感とする。それに反し，現代青年の空虚感や非行，あるいはスチューデントアパシーやモラトリアムなどの自我確立のおぼつかなさはどうしたことだろう。それは各成長段階での課題をおろそかにし，そこでの葛藤を回避させてきた家庭や，物質的欲求と効率性追求のために意志力や誠実さなどの「徳」を育て得なかった社会にその原因を見出すことができるのではないだろうか。

「徳」こそが生きがい感を支えるものである。価値の多様性が論じられる今日であるが，「徳」の実現こそ人生の最高の価値であり，青年の自我形成も，この「徳」によって，はじめて確立への道を辿っていく。こうしてみると，自我の形成が目ざす価値とは，究極的にはこの人格的，内的活力，「徳」による自己実現であると考えられるのである。

（本学教授＝心理学・哲学・道徳教育担当）

注・参考文献

1－1　Spranger, E.　；Psychologie des Jugendalters, 1926
「青年の心理」原田茂訳　協同出版　1969
；Lebensformen, 1922

Hall, G.S.　；Adolescence：Its Psychology and Its Relation to Physiology, Anthropology, Sociology, Sex, Crime, Religion and Education, 1904

1－2　Mead, G.H.　；Mind, Self and Society—From the standpoint of a social behaviorist, 1934

1－3　猪飼道夫・高石昌弘；「身体発達と教育」第一法規　1967

1－4　Dennis, W.　；The Adolescent *in* L.Carmichael (ed), Manual of child Psychology, 1946

1－5　西平直喜　；「価値と生きがいの探究」津留宏 編「青年心理学」有斐閣双書　1985

1－6　Hall, G.S.　；Adolescence 上掲

1－7　依田新 他編　；「青年の性格形成」（現代青年心理学講座４）金子書房　1973

1-8 Hurlock, E. ; Adolescent Development. Mc Graw-Hill, 1949
1-9 Bühler, C. ; Das Seelenleben des jugendlichen Versuch einen Analyse und Theorie der psychischen Pubertät 1967
1-10 Erikson, E.H. ; Identity and the Life Cycle. Selected Papers, Psychological Issues Vol.1 No.1 1959
1-11 西平直喜 ;「青年期における発達の特徴と教育」岩波講座 子どもの発達と教育 6 1979
2-1 山下栄一 ;「青年期に関する諸学説」井上健治 他編「青年心理学」有斐閣 1981
2-2 Freud, S. ;「集団心理学と自我の分析」1921
2-3 総理府 ;「青少年の連帯感などに関する調査」1976
内閣広報室 ;「青少年に対する成人の意識に関する調査」1976
2-4 田中熊次郎 ;「新訂 児童集団心理学」明治図書 1975
2-5 総理府青少年対策本部;「青少年白書」大蔵省印刷局 1971
2-6 野辺地正之 ;「自我意識の変容」津留宏 編「青年心理学」有斐閣双書 1986
2-7 Freud, S. ;「続精神分析入門」古沢平作 訳 日本教文社 1932
2-8 今田恵 ;「宗教心理学」文川堂
鈴木清 他 ;「青年心理学」福村出版 1976
2-9 朝日新聞 ;「青年の悩み」1969.11.20
2-10 NHK 放送世論調査所編;「青年の意識」(NHK 世論調査資料集 資料と分析 53年度版 1976
2-11 May, R. ; Psychology and the Human Dilemma 1967
2-12 神谷美恵子 ;「生きがいについて」みすず書房 1980
2-13 Frankl, V.E ; Aerztliche Seelsorge, 6. Aufl, 1952
「死と愛一実存分析入門」霜山徳爾 訳 みすず書房 1952
2-14 Fromm, E. ; Man for Himself : An Enquiry into the Psychlogy of Ethics. New York : Rinehart and Company, 1947
「人間における自由」谷口隆之助 早坂泰次郎 訳 創元新社 1968